

優秀賞

ありがとう、足ながおばさん

岩手県 宮古市立崎山小学校六年 高橋 琉愛

ナミ子さん、私はもう六年生になりました。児童会長として頑張っています。

おばさんが私の家の親せきだということを知った時はびっくりしました。

一年生に入学したころからずっと『足ながおばさんのまごころ文庫』のファンだったからです。

図書室に並べられているたくさんのは、ナミ子さんが三十五年間もの長い間母校のため送り続けたもの。

毎月、毎月、励ましのお手紙と一緒に送られてくるプレゼント。そのお便りを読んで、とてもおどろきました。おもわず、

「えっ、これって朝早起きして、新聞配達をして送ってくれた本だったの？」

と叫んでしまいました。

ナミ子さんは、私たちの崎山小学校の大先輩。大

人になってからは、母校のため後輩たちのために崎山小で一生涯けん命働いてくださったことも知りませんでした。

その後、遠い埼玉県へ引っ越し、それからずっと私たちにすてきな贈り物を届けてくれていたんですね。

三十五年間も続けてこられたのはどうしてなのかなあと思ってお手紙をさしあげたら、長い長いお返事が返って来ました。

そのお便りには「感謝」という言葉が何度も書かれています。

「送り続けて三十五年、皆さんから元気をいただきふるさとを忘れることなく、崎山に住んでいるがごとくに過ごせる毎日に感謝でいっぱいです。」との書き出しが始まって、家族へ、地域へ、そしてふるさと崎山の人々の温かさや豊かさ、自然へと一つ一

つていねいに「ありがとう」の気持ちがつづられて
いました。

最後に「何よりも崎山小学校の皆さんとの交流が
できていることが最大の感謝です。」と結んであり
ました。

まだ一度もお目にかかったことのない福田さんで
すが、その優しさや思いやりに感謝をして「足なが
おばさん」と呼ばせてもらっている私たち。

「ありがとう」の心がやまびこのようにひびき合
い続けてきたことは、崎山小の宝物だと思います。

私はあの大津波の日、黒い波に追いかけれなが
らも必死で山へかけ上がり、真っ暗な道を一生けん
命歩き続けました。

電気が消え、テレビもラジオもだめ。水も食べ物
も不足する中、楽しみだったのは、絵本を読んでも
らうことでした。

今でもナミ子さんの本を開くと、行ったことな
い場所へ旅に出かけたり、昔の人や外国の人とも友
達になれたり、世界が広がっていくようでわくわ
くします。これからも、まごころの届くのを楽しみ
にしています。

